



## 巻 頭 言

### 環境美化は畦畔の整備から

(財)日本植物調節剤研究協会 常務理事 小澤 啓男

最近、環境問題の議論が盛んであるが、その中で、水田は国土の環境保全に重要な役割を果たしているとの機能がようやく評価され始めた。

水田は単なるコメを作るだけの場ではなく、雨の多い傾斜地形の日本列島では治水、土壤流出防止などダムに劣らぬ機能を発揮している。これをダム建設費に換算したら、7～8兆円になるとの試算を目にしたことがある。農業は日本のお荷物産業のように批判している経済学者もこの点は認めざるを得ないところであろう。

私の生まれ育ったところは、総戸数40戸足らず、標高750メートルを越し、縦に長い山合いの集落で、たんぼと呼ぶのにふさわしい一筆10アール足らずの水田を、何故か互いに分散耕作していた。夏の来るのが遅い、寒い高冷地で、移植と共にイネを健全に育てるには水への依存が極めて大きく、水の重要性は折々に、親から周りの人達から教え込まれた。水を保持するために、畦畔の『あぜぬり』は極めて大事な農作業であり、この時間を要する多労な作業の辛さを、手伝いつつ味わったものである。顔に泥をとばしながら、無心に畦塗り作業を続けている農夫の姿は、いま3Kの一つなどと軽々しく口にする人に比し、一生懸命すぎる程一生懸命で誠実すぎる程誠実な人間本来のあるべき姿として脳裏に焼き付いている。

すき、くわを用いた耕起がエンジンのうなりに代わり、月明かりで苗取りをして、暗くなるまで続いた田植えも機械化され、あの四つん這いの最も苦痛な草取りからも解放された現在、水稻栽培は大きく様変わりした。とはいえ、水をためて栽培することには変わらない。とすれば、あぜの重要性は依然として変わらない筈である。

水田の区画整理がまだ進まない頃、畦畔は水

田の一割に近い面積を持ち、とくに山間の水田は小さくてもあぜ塗りは2キロにも3キロにも及び、数日を要した。いま、畦畔は水田面積の6%程度にまで減ってきているが農家があぜの手入れをしなくなったら、降り続く雨であぜは崩れ易く、ダム機能を失い下流は溢水する。

あぜ作りはこのようになかなか大変であるがこれを健全に保つためには、畦畔に生える雑草管理も重要である。イネは通常、畦畔沿いの生育が優れる。草管理を良好にして通風、採光を良くした状態では畦畔に接したイネの生育は良く、数%の収量増が認められている。これを周辺効果という。しかし、逆に管理不良の状態ではイネの生育、収量に悪い影響を及ぼし十数%減の例さえ見られる。かつては、家畜の飼料として価値のあったあぜ草もその意味を失い、刈り捨てるだけになった。この草刈りは田植え前に一回、イネの分けつ期から出穂前にかけて一、二回、収穫する前に一回行うのが一般的であり除草剤は最初の管理に利用されることが多い。背負い式の草刈機で10アールの畦畔の草を刈るのには、小一時間を要する。

今後、農業の担い手の高齢化がすすむことや少数の担い手が貴重な水田を守り収量を安定維持していくためには、必然的に区画の拡大がすすめられ、これに伴って畦畔も長大する、などを考えると、畦畔の保全管理方法について早急な検討が必要である。協会では生育調節剤を利用して、草丈伸長を抑えて短草化する技術の開発研究をすすめ、ゆくゆくは畦畔に適する植物(カバークロップ類など)を育成して、管理の容易な草生畦畔の造成などを計画している。

瑞穂の国にふさわしい美田の連なる景観を是非、維持継続したいと考えるからである。